

「失われたアーク」

ハンコック

マナセについて「罪のない者の血をひじょうに多く流し、その血でエルサレムを端から端まで満たした」と書かれている理由を解釈するには、このような仮説こそ手がかりとなるのである。

ともあれ、後世の人びとはこの王の治世を、汚点であり、狂気であり、呪われた時代と見なすようになった。マナセは紀元前642年に死に、王権は息子のアモンに引き継がれたが、その後まもない紀元前640年にヨシヤがアモンのあとを引き継いでいる。ヨシヤは、伝統的なヤハウエ信仰を復興したことで名高い熱心な改革者である（しかも聖書筆者にも愛されている）。

だが、なぜアモンの在位期間はこれほど短いのか？ 聖書によれば、その理由はつぎのようになる。

彼は、その父マナセが行なったように、主の目に悪とされることを行なった。彼は、父の歩んだ道をそのまま歩み、父が仕えた偶像に仕え、それらを拝んだ。...アモンの家来たちは彼に謀反を起こし、この王を宮殿のなかで殺した。.....民衆はアモンの子ヨシヤを代わりに王とした。

ヨシヤはわずか「8歳で王となった」。しかし、「ダヴィデの神につきしたが」おうとする最初の兆候を見せたのは、その治世の8年目だったと聖書には記されている。事実、この若い王がマナセやアモンの罪を激しく糾弾するようになるのは、ヨシヤ治世の12年目にあたる20歳のときからである。このときから王は「ユダとエルサレムを清めはじめて.....彫像、および鋳物の像を取り除」く運動に乗り出したのである。

彼は、彫像「アシェラ」を主の宮から、エルサレムの外のキデロン川に運び出し、それをキデロン川で炊いた。彼はそれを粉々に砕いて灰にし、その灰を共同墓地にまき散らした。なんとも劇的な転向である！ この事件が起こつたのは紀元前628年、つまりヨシヤ治世の21年目のことだ。この年、マナセの忌々しい偶像は、ついに至聖所から一掃された。だが、それと入れ代わりにアークがもどったわけではない。それから2年がたっても聖遺物はもどってこなかった。そのことを嘆く民衆に答えて、エレミヤは、人びとが「主の契約のアークはどこにあるのか」ともはや問うこともなく、「嘆きもせず」また「ふたたびつくりよう」と考えることもなくなる時がいつかやってくる、と予言したのだ。

4年後、ヨシヤは、レビ人にアークを神殿にふたたび据えるように、と叶うわけもない命令を下した。アークは「もう、あなたたちにとつて肩の重荷にはなるまい」と王は付けくわえた。これが紀元前622年、つまりヨシヤ治世18年目のことである。一方、まさにこの同じ年、ヨシヤは長期にわたる国全体の異教信仰の一掃作業を終え、「エルサレムに帰って.....主の宮を修理する」命令を下している。これは偶然の一致ではない。

修理作業は「大工、建築作業員、石工」によつて着実にすすめられた。けれども、大きな謎は、レビ人が「聖なるアークを、イスラエルの王ダヴィデの子ソロモンが建てた宮に据えなさい」というヨシヤの命令にしたがえる状況になかったことである。この謎に対する答えが、エチオピアにあるのはまちがいになかった。